

第1群	1-10 洗身（介助の方法）
1-10 洗身	評価値：②介助の方法 1. 介助されていない 2. 一部介助 3. 全介助 4. 行っていない

## (1) 調査項目の定義

「洗身」の介助が行われているかどうかを評価する項目である。  
ここでいう「洗身」とは、浴室内（洗い場や浴槽内）で、スポンジや手拭い等に石鹸やボディシャンプー等を付けて全身を洗うことをいう。

## (2) 選択肢の選択基準

「1. 介助されていない」	・一連の「洗身」（浴室内で、スポンジや手拭い等に石鹸やボディシャンプー等を付けて全身を洗うこと）の介助が行われていない場合をいう。
「2. 一部介助」	・介護者が石鹸等を付けて、体の一部を洗う等の場合をいう。 ・足すり等が行われている場合も含まれる。
「3. 全介助」	・一連の「洗身」（浴室内で、スポンジや手拭い等に石鹸やボディシャンプー等を付けて全身を洗うこと）の全ての介助が行われている場合をいう。 ・本人に手の届くところを「洗身」してもらった後、本人は「洗身」した箇所も含めて、介護者が全てを「洗身」し置いている場合は、「3. 全介助」を選択する。
「4. 行っていない」	・日常的に「洗身」を行っていない場合をいう。

## (3) 調査上の留意点及び特記事項の記載例

入浴事項は問わない。

洗身行為は含まない。

入浴行為は、この項目には含まない。

57

第1群	1-10 洗身（介助の方法）
-----	----------------

・介護者による介助が、むしろ本人の自立を阻害しているような場合

など、対象者が不適切な状況に置かれていると認定調査員が判断する様々な状況が想定される。

## ◆特記事項の例◆

浴室で、介護者がおらず、本人の足では入浴は困難なく行っていることであるが、片手が固定されており、本人も洗濯むしっていることから、不適切な状況と判断し、適切な介助の方法を選択する。肩関節に強い拘縮があることながら「2. 一部介助」を選択する。

## (4) 異なった選択が生じやすい点

対象者の状況	置った選択	正しい選択と留意点等
本人に手の届くところを「洗身」してもらい、お入りに洗身するたけにもう一度、本人が洗身した箇所も含めて介護者が全てを洗っている。	「2. 一部介助」	「3. 全介助」を選択する。 本人が手の届くところは「洗身」していても、お入りに洗身するためにもう一度、本人が洗身した箇所も含めて介護者が全てを「洗身」し置いている場合は、「3. 全介助」を選択する。

## 要介護認定

## 認定調査員テキスト

2009

改訂版

平成 27 年 4 月



## 第2群 2-2 移動（介助の方法）

評語軸：②介助の方策	
2.2 移動	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 介助されていない</li> <li>2. 見守り等</li> <li>3. 一部介助</li> <li>4. 全介助</li> </ol>

### (1) 調査項目の定義

「移動」の介助が行われているかどうかを評価する項目である。ここでいう「移動」とは、「日常生活」において、食事や排泄、入浴等で、必要な場所への移動にあたって、見守りや介助が行われているかどうかで選択する。

## (2) 選択肢の選択基準

	「移動」の介助が行われていない場合をいう。
	・「移動」の介助が行われている場合をいう。 ・「移動」の介助は行われていないが、「見守り等」が行われている場合をいう。 ・ここでの「見守り等」とは、常時の付き添いの必要とする「見守り」や、認知症高齢者等の場合に必要行為の「監視」「指示」「声かけ」等のことである。
	② 見守り等
	③ 一部介助
	・自力では、必要な場所への「移動」ができないために、介護者が手を取る、身体を支える、段差で歩行を伴う等の「移動」の行為の一部に介助が行われている場合をいう。
	④ 全介助
	・自力では、必要な場所への「移動」ができないために、「移動」の行為の全てに介助が行われている場合をいう。

(3) 調査上の留意点及び特記事項の記載例

移動の手段は問わない、  
鐵足や道具等を装着している場合や、車いす・歩行器などを使用している場合は、その状況に基づいて評価する。  
車いす等を使用している場合は、車いす等に形染したあとの移動について評価する。

## 第2群

### 2-2 移動（介助の方法）

④ 「実際の介助の方法」が不適切な場合

「介助されていない」状態や「実際に行われている介助」が、対象者にとって「不適切」であると認定委員が判断する場合は、その理由を特記事項に記載した上で、適切な「介助の方法」を選択し、介護認定審査会の判断を仰ぐことができる。

- ・結婚や日中婚等による介護者が不在のために適切な介護が提供されていない場合
- ・介護放棄、介護拒絶のために適切な介護が提供されていない場合
- ・介護者の身身の状況から介護が提供できない場合
- ・介護による介護材、むしろ本人の自立を促しているような場合
- など、対象者が不適切な状況に置かれていると判断を職員が判断する様な状況が認められる。

・介護者の心身の状態から介助が提供できない場合

・引續きによる非効力、むしろ本人の自立を阻害しているような場合など、対象者が不適切な状況に置かれていると認定した国が制度上エ

### ◆特記事項の例◆

本人は、一人で修飾を行っているが、医師から注意を受けているものの、介護者の養も足額が得く、十分な介護を行うことができないことから、不適切な状況にあると判断し、適切な介助の方法を選択する。聞き取った医師の態度などから、「2.見守り等」を選択した。

(4) 異なった選択が生じやすい点

<p>「完全介助」を意味する。          介助されている患者の大半が杖でもあり、「歩行」の機能が全くない状況である。四肢に強い麻痺がみられる。</p>	<p>「完全介助」を意味する。          介助されている患者の大半が杖でもあり、「歩行」の機能が全くない状況である。四肢に強い麻痺がみられる。</p>	<p>「完全介助」を意味する。          介助されている患者の大半が杖でもあり、「歩行」の機能が全くない状況である。四肢に強い麻痺がみられる。</p>
-------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------

## 第2群 2-2 移動（介助の方法）

外出行為に関しては、含まない。

◆特記事項の所◆  
現在、入所中であり、場所の制約がまず、料理、食卓、入浴等、生活のすべての面で平を引いて禁む必要があるため、(3)一階介台を遮断する、週2回、平引をしても低減し、なだめるまでに10分程度かかることが発生しており平引が効かっている。

自宅内ははを使用して自力で介助なして「移動」を行っているため「L介助されていない」を選択する。しかし、通院時（1回/週）に外出する際には、車いすを拜してもらう。

① 明星夜等の時間帯や体調等によって介助の方法が異なる場合

一定期間(調査日より概ね過去1週間)の状況において、より頻回に見られる状況や日頃の状況で要する。

その場合、その日頃の状況等について、具体的な内容を「特記事項」に記載する。

◆仲居本項の例◆  
母屋の間にある3トイレまでの「移動」(5 両端/月)など、通常は自力で介助なしで行っているが、寒い冬(3月/日)及び降雪(運動場)への移行までの「移動」は、介助が行われている。より細面の状況から「介助されていない」を選択する。

より周囲の状況から「1.介助されていない」を選択する。

② 福祉用具（福祉用具や介護用品等）や器具類を使用している場合

播種用具(種袋等)・圃用品等)や器具類を使用している場合は、使用している状況で選択する。  
 鍬足や鍬具等を使用している場合は、その状況に基づいて選択する。

車いす等を使用している場合は、車いす等に移乗したあとの移動について選択する。

車いす等を使用している場合は、車いす等に移乗したあとの移動について選択する。

◆特記事項の例◆

自宅内では、通常車いすで介助が行われているため、「4.全介助」を選択する。ただし、外出（4回/週）は、電動車いすを使用しているため、自力で介助なしで行っている。

④ 調査対象の行為自体が発生しない場合

格差への移動など移動の機会がない場合は、多くはないと考えられるが、現状きり状態などで、「移動」の機会が全くない場合は、(1)調査項目の定義で規定されるような行為の生じた場合を想定し、適切な方法を選択し、そのように判断できる具体的な事実を特記事項に記載する。

### ◆特記事項の例◆

低学的な理由から、一週間に以上に「格助」の横金が入金しないが、因縁ともに筋力の低下が顕著であり、草帽子自走も不可能と判断し「4.全介助」を選択する。



第2群 2-5 排泄 (介助の方法)	
2.5 排尿	評価法: ②介助の方法 1. 介助されていない 2. 見守り等 3. 一部介助 4. 全介助
(1) 調査項目の定義	
「排便」の介助が行われているかどうかを評価する項目である。 ここの「排便」とは、排便動作 (スポンパンプの上げ下げ、トイレ、尿器への排泄)「尿器の排泄」「トイレの水洗」「トイレやポータブルトイレ、尿器等の排泄後の掃除」「オムツ、リハビリパンツ、尿とりパットの交換」「排泄したカテーテルの排泄」の一連の行為のことである。	
(2) 選択肢の選択基準	
「1. 介助されていない」	「排便」の介助が行われていない場合をいう。
「2. 見守り等」	「排便」の介助が行われていないが、「見守り等」が行われている場合をいう。 ・ここの「見守り等」とは、常時の付き添いの必要がある「見守り」「確認」「指示」「声かけ」や、認知症高齢者等をトイレ等へ誘導するために必要な「確認」「指示」「声かけ」等のことである。
「3. 一部介助」	「排便」の一連の行為に部分的な介助が行われている場合をいう。
「4. 全介助」	調査対象者の「排便」の介助の全てが行われている場合をいう。
(3) 調査上の留意点及び特記事項の記載例	
尿器の有無は問わない。 トイレやポータブルトイレ、尿器等の排泄後の掃除は含まれるが、トイレの日常的な掃除は含まない。また使用したポータブルトイレの排泄物を一括して行う場合は、排泄の直後であるかどうかや、その回数に関わらず「排便後の排泄」をして評価する。	
(4) 異なった選択が生じやすい点	
調査者の状況 人工透析で、尿器が全くない。	異なった選択 「4. 全介助」 正しい選択と留意点等 「1. 介助されていない」を選択する。 排便自体が全くない場合は、介助自体が実施されていないため、「1. 介助されていない」を選択する。

第2群 2-5 排泄 (介助の方法)	
2.5 排尿	その回数に関わらず「排便後の排泄」をして評価する。 トイレまでの移動に関する介助は、他の排泄行為とともに「2.2 移動」で評価するが、トイレ等へ移動するための「確認」「指示」「声かけ」は、「2.1 見守り等」として評価する。トイレやポータブルトイレへの排泄に関する介助は、他の排泄行為とともに「2.1 移動」で評価する。 失禁した者の排泄の支障に関する介助は、他の排泄行為とともに「2.10 上衣の着脱」「2.11 スポン等の着脱」で評価する。
① 調査項目の定義	
「排便」の介助が行われているかどうかを評価する項目である。 ここの「排便」とは、「排便動作 (スポンパンプの上げ下げ、トイレ、尿器への排泄)」「尿器の排泄」「トイレの水洗」「トイレやポータブルトイレ、尿器等の排泄後の掃除」「オムツ、リハビリパンツの交換」「排泄したカテーテルの排泄」の一連の行為のことである。	
(2) 選択肢の選択基準	
「1. 介助されていない」	「排便」の介助が行われていない場合をいう。
「2. 見守り等」	「排便」の介助が行われていないが、「見守り等」が行われている場合をいう。 ・ここの「見守り等」とは、常時の付き添いの必要がある「見守り」「確認」「指示」「声かけ」や、認知症高齢者等をトイレ等へ誘導するために必要な「確認」「指示」「声かけ」等のことである。
「3. 一部介助」	「排便」の一連の行為に部分的な介助が行われている場合をいう。
「4. 全介助」	調査対象者の「排便」の介助の全てが行われている場合をいう。
(3) 調査上の留意点及び特記事項の記載例	
トイレやポータブルトイレ、尿器等の排泄後の掃除は含まれるが、トイレの日常的な掃除は含まない。また使用したポータブルトイレの排泄物を一括して行う場合は、排泄の直後であるかどうかや、その回数に関わらず「排便後の排泄」をして評価する。	



第2群 2-6 排便（介助の方法）

トイレまでの移動に際する介助は、他の移動行為とともに「2.5 移動」で評価するが、トイレへ向かうための「排泄」「指示」「声かけ」は、「2.見守り等」として評価する。トイレやボタリットイレへの移動に際する介助は、他の移動行為とともに「2.1 移動」で評価する。  
失禁した場合の衣服の更衣に際する介助は、他の排泄行為とともに「2.10 上衣の着脱」「2.11 ストックの着脱」で評価する。  
排泄や排便等の行為そのものは含まれないが、これらの行為に付随する排便の一連の行為は含む。

◆特記事項の例◆  
トイレまでの移動が行われているが、排便行為には介助が行われていないため、「1.介助されていない」とする。

◆特記事項の例◆  
排便行為は、一連の「排泄」「指示」「声かけ」が行われ、排泄行為には介助が行われていないため、「1.全介助」を選択する。

◆特記事項の例◆  
排便行為には介助が行われていないが、認知症のため、トイレに行くタイミングがわからない。定期的に声かけを行っていることから「2.見守り等」を選択する。

① 排泄等の時間帯や体調等によって介助の方法が異なる場合

一定期間（例えばより概ね1週期）の状況において、より頻回に見られる状況や日頃の状況で選択する。  
その場合、その日頃の状況等について、具体的な内容を「特記事項」に記載する。

◆特記事項の例◆  
通常は、トイレの移動は介助が行われていないが、下痢を数日前に起因し、下痢用紙は必ず「2.10 上衣の着脱」で使用する「2.11 ストックの着脱」の介助が行われている。より頻回な状況から「1.全介助」を選択する。

② 排泄用具（排泄具や介護用品等）や器具類を使用している場合

排泄用具（排泄具や介護用品等）や器具類を使用している場合は、使用している状況で選択する。  
◆特記事項の例◆  
人工肛門（ストーマ）を使用しているが、自分でストーマの準備、交換、排便まで行っているため、「1.介助されていない」を選択する。

③ 「実際の介助の方法」が不適切な場合

「介助されていない」状態や「実際にやっている介助」が、対象者にとって「不適切」であると認定委員が判断する場合は、その理由を特記事項に記載した上で、適切な「介助の方法」を選択し、介護認定審査会の判断を仰ぐことができる。

85

第2群 2-10 上衣の着脱（介助の方法）

評価軸：②介助の方法
2-10 上衣の着脱
1. 介助されていない 2. 見守り等 3. 一部介助 4. 全介助

(1) 調査項目の定義

「上衣の着脱」の介助が行われているかどうかを評価する項目である。  
ここでいう「上衣の着脱」とは、普段使用している上衣等の着脱のことである。

(2) 選択肢の選択基準

「1. 介助されていない」
・「上衣の着脱」の介助が行われていない場合をいう。
「2. 見守り等」
・「上衣の着脱」の介助は行われていないが、「見守り等」が行われている場合をいう。 ここでいう「見守り等」とは、着脱の付き添いの必要がある「見守り」や、認知症高齢者等の場合に必要となる「監視」「指示」「声かけ」等のことである。
「3. 一部介助」
・「上衣の着脱」の際に介助が行われている場合であって、「見守り等」「全介助」のいずれにも含まれない場合をいう。
「4. 全介助」
・「上衣の着脱」の一連の行為すべてに介助が行われている場合をいう。

(3) 調査上の留意点及び特記事項の取扱い

時刻にあった衣服の選択、衣服の準備、手洗し等、着脱までの行為は含まない。  
服を脱いでから行う行為や袖通しなど一連の行為すべてが介護者によって行なわれていれば、首や体圧感知などの行為は、介護者の介助の方法を自由にさまざまな影響を生えていないことから、選択肢の選択には影響を及ぼさないと判断し、一連の行為を全体に対してすべて介助されていると考える。「全介助」を選択する。  
一方、介護者が構えている間に「自ら袖に腕を通す」場合は、腕を解く介助は行われていないもの

85

第2群 2-6 排便（介助の方法）

なお、認定調査員が、「実際に行われている介助が不適切」と考える場合には、  
・結局や日中夜間等による介護者不在のために適切な介助が提供されていない場合  
・介護放棄、介護拒絶のために適切な介助が提供されていない場合  
・介護者の心身の状態から介助が提供できない場合  
・介護者による介助が、むしろ本人の自立を阻害しているような場合  
など、対象者が不適切な状況に置かれていると認定調査員が判断する様々な状況が想定される。

◆特記事項の例◆  
結局、本人により、自分で排便していることだが、調査時にトイレに使用付いていないため、不適切な状況にあると判断し、適切な介助の方法を選択する。ストッキングの上げ下げの介助を行うことが適切と考える（「2.一部介助」を選択する）。

(4) 異なった選択が生じやすい点

好ましい状況	傾むく選択	正しい選択と調査員等
人工肛門で「ストーマ」を介助されている	「2.一部介助」を選択する	人工肛門（ストーマ）の場合、ストーマ等の準備、交換、排便は介助が行われているが、ストーマ等の交換は自分でできる。

86

第2群 2-10 上衣の着脱（介助の方法）

の、袖通しは自ら行っていることから、一連の行為の「前に介助があると判断し、「2.一部介助」を選択する。  
◆特記事項の例◆  
介護者が上衣を解くと自ら袖に通すので「3.一部介助」を選択する。  
◆特記事項の例◆  
袖を通す際に杖や椅子を使用するように勧めたことがあるが、介護者が着脱全体の介助を行っていることから、「1.全介助」を選択する。

① 排泄等の時間帯や体調等によって介助の方法が異なる場合

一定期間（例えばより概ね1週期）の状況において、より頻回に見られる状況や日頃の状況で選択する。  
その場合、その日頃の状況等について、具体的な内容を「特記事項」に記載する。

② 排泄用具（排泄具や介護用品等）や器具類を使用している場合

排泄用具（排泄具や介護用品等）や器具類を使用している場合は、使用している状況で選択する。  
◆特記事項の例◆  
通常は上衣の着脱を自力で行うことはできないが、着脱しやすい上衣を使用しており、自力で介助なしで行っているため、「1.介助されていない」を選択する。

③ 「実際の介助の方法」が不適切な場合

「介助されていない」状態や「実際に行われている介助」が、対象者にとって「不適切」であると認定委員が判断する場合は、その理由を特記事項に記載した上で、適切な「介助の方法」を選択し、介護認定審査会の判断を仰ぐことができる。  
なお、認定調査員が、「実際に行われている介助が不適切」と考える場合には、  
・結局や日中夜間等による介護者不在のために適切な介助が提供されていない場合  
・介護放棄、介護拒絶のために適切な介助が提供されていない場合  
・介護者の心身の状態から介助が提供できない場合  
・介護者による介助が、むしろ本人の自立を阻害しているような場合  
など、対象者が不適切な状況に置かれていると認定調査員が判断する様々な状況が想定される。

◆特記事項の例◆  
自分で排便しているが、ヘルパー訪問時には、着脱しきれないまま着るなど、おかしな着方がみられることから「不適切な状況にある」と判断し、適切な介助の方法を選択する。着脱行為には介助が必要ないが、足穿きを行うのが適切と考える（「2.見守り等」を選択する）。

91



## (4) 異なった選択が生じやすい点

着脱者の状況	異なった選択	正しい選択と留意点等
「上衣の着脱」は、自力で介助なしで行っているが、着る順番が分からず、一方向で、一方向で着る。着る順番が分からず、一方向で着る。着る順番が分からず、一方向で着る。	③「一部介助」	②「見守り等」を選択する。 声かけを行って、②「見守り等」を選択する。なお、衣服の手渡しは一度の行為に含められない。

衣服を用意して手渡ししている。

## 評価軸：②介助の方法

2-11 スボン等の着脱
1. 介助されていない 2. 見守り等 3. 一部介助 4. 全介助

## (1) 調査項目の定義

「スボン等の着脱」の介助が行われているかどうかを評価する項目である。  
ここでいう「スボン等の着脱」とは、普段使用しているスボン、パンツ等の着脱のことである。

## (2) 選択肢の選択基準

「1. 介助されていない」
・「スボン等の着脱」の介助が行われていない場合をいう。
「2. 見守り等」
・「スボン等の着脱」の介助は行われていないが、「見守り等」が行われている場合をいう。 ・ここでいう「見守り等」とは、着脱の付き添いの必要がある「見守り」や、認知症高齢者等の場合に必要行為の「確認」「指示」「声かけ」等のことである。
「3. 一部介助」
・「スボン等の着脱」の際に介助が行われている場合であって、「見守り等」「全介助」のいずれにも含まれない場合をいう。
「4. 全介助」
・「スボン等の着脱」の一連の行為すべてに介助が行われている場合をいう。

## (3) 調査上の留意点及び特記事項の記載例

時機にあった衣服の選択、衣服の準備、手渡し等、着脱までの行為は含まない。  
服を体にあてがう行為やスボンに足を通すなど一連の行為すべてが介助者によって行なわれている。足や腰、体幹を補助するなどの行為は、介助者の方法や体位に大きな影響を及ぼさないことから、選択肢の選択には影響を及ぼさないとして判断し、一連の行為全体に対してすべて介助されていると考え、④「全介助」を選択する。

一方、介助者が着ているスボンに「自ら足を通す」場合は、服を解ける介助が行われているもの

95

の、スボンに足を通す行為は自ら行っていることから、一連の行為の一部に介助があると判断し、③「一部介助」を選択する。

◆特記事項の例◆  
介助者がスボンを解けると自ら脚を通すが、引き上げボタンを解ける動作は介助を行って③「一部介助」を選択する。

◆特記事項の例◆  
スボンを引き上げようとする際に、足を上げようとするが、足を通す、引き上げ、ボタンを解めるなどの一連の行為すべてに介助が行われているため、④「全介助」を選択する。

## ① 朝服着脱の際の帯や体調整等によって介助の方法が異なる場合

一定期間（調査日より数週間）の状況において、より頻回に見られる状況や日頃の状況で選択する。その場合、その日頃の状況等について、具体的な内容を「特記事項」に記載する。

## ② 福祉用具（福祉用具や介護用品等）や器具類を使用している場合

福祉用具（福祉用具や介護用品等）や器具類を使用している場合は、使用している状況で選択する。

◆特記事項の例◆  
福祉用具や介護用品を使用しており、自力で介助なしで行っているため、「1. 介助されていない」を選択する。

## ③ 調査対象者の行為自体が生じない場合

日頃、スボンを着ない場合（浴衣形式の服装など）は、パンツやオムツの着脱の行為で代替して評価する。通常のスボンの着脱行為がある場合は、これらの行為の評価対象には含まない。

## ◆特記事項の例◆

浴衣タイプの服装を着ているため、スボンを着脱する機会がないことから、パンツの着脱の行為で代替して評価する。トイレ時に入浴時も介助されていないことから、「1. 介助されていない」を選択する。

## ④ 「衣服の介助の方法」が不適切な場合

「介助されていない」状態や「実際に行われている介助」が、対象者にとって「不適切」であると認定調査員が判断する場合は、その理由を特記事項に記載した上で、適切な「介助の方法」を選択し、なお、認定調査員が、「実際に行われている介助が不適切」と考える場合は、

- ・施設や日中施設等による介護者不在のために適切な介助が提供されていない場合
- ・介護放棄、介護抵抗のために適切な介助が提供されていない場合
- ・介護者の心身の状態から介助が提供できない場合

97

・介護者による介助が、むしろ本人の自立を阻害しているような場合  
など、対象者が不適切な状況に置かれていると認定調査員が判断する様々な状況が認定される。

## ◆特記事項の例◆

自分でスボンの着脱をしているが、ペルマー・防犯服には、ボタンが解らなくてお尻が解らなくて、足や腰、体幹を補助するなどの行為は、介助者の方法や体位に大きな影響を及ぼさないことから、選択肢の選択には影響を及ぼさないとして判断し、一連の行為全体に対してすべて介助されていると考え、④「全介助」を選択する。

## ◆特記事項の例◆

自分でスボンに足を通す行為は自ら行っているが、引き上げボタンを解ける動作は介助を行って③「一部介助」を選択する。

## (4) 異なった選択が生じやすい点

着脱者の状況	異なった選択	正しい選択と留意点等
スボンの着脱は、自力で行っているが、着る順番が分からず、一方向で着る。着る順番が分からず、一方向で着る。	③「一部介助」	②「見守り等」を選択する。 声かけを行って、②「見守り等」を選択する。なお、衣服の手渡しは一度の行為に含められない。

98



## 障害高齢者の日常生活自立度（総たきり度）

## (1) 判定の基礎

調査対象者について、調査時の様子から下記の判定基準を参考に該当するものに○印をつけること。なお、全く調査等を有しない者については、自立に○をつけること。

生活自立	何らかの調査等をするが、日常生活はほぼ自立しており協力で外出する
ラングJ	1. 交通機関等を利用しで外出する 2. 隣近所へなら外出する
ラングA	屋内での生活は概ね自立しているが、介助には外出しない 1. 介助により外出し、日中はほとんどベッドから離れて生活する 2. 外出の頻度が少なく、日中寝たり起きたりの生活をしている
ラングB	屋内での生活は何らかの介助を要し、日中もベッド上での生活が主体であるが、座位を保つ 1. 車いすに移乗し、食事、排便はベッドから離れて行う 2. 介助により車いすに移乗する
ラングC	1日中ベッド上で過ごし、排便、食事、着替において介助を要する 1. 自力で搬送りをうつ 2. 自力では搬送りをうつてない

※判定に当たっては、補聴器や自動昇降の器具を使用しは状態であっても差し支えない。

## (2) 判定にあたっての留意事項

この判定基準は、施設や通所等の環境において、保護者等が何らかの調査を有する高齢者の日常生活自立度を客観的に判断することを目的として作成したものである。

判定に関しては「～をすることができ」といった「能力」の評価ではなく「状態」に「特」に「特」に関する状態に着目して、日常生活の自立の程度を4段階にラングに分けることで評価するものとする。なお、本基準においては何らかの調査を有しない、いわゆる超高齢者は対象としていない。4段階の各ラングに関する留意点は以下のとおりである。

## 調査対象者の時間常や体調等によって能力の程度が異なる場合

一定期間（例えばより調査1週間）の状況において、より頻回に見られる状況や日間の状況で選択する。

その場合、その日頃の状況等について、具体的な内容を「特記事項」に記載する。

## 認知症高齢者の日常生活自立度

## (1) 判定の基礎

調査対象者について、訪問調査時の様子から下記の判定基準を参考に該当するものに○印をつけること。なお、まったく認知症を有しない者については、自立に○印をつけること。

## 【参考】

ラング	判断基準	見られる症状・行動の例
I	何らかの認知症を有するが、日常生活は日常生活に支障をきたすような症状・行動や意思疎通の問題が多少見られるが、誰かが注意してれば自立できる。	たばこに道に迷うとか、買物や食事、金銭管理などそれまでできたことにミスが目立つ等
II	家庭内で上記IIの状態がみられる。	服装管理ができず、電気の配線や訪問者などの対応など一人で留守番ができない等
III	家庭内でも上記IIの状態が見られ、日常生活に支障をきたすような症状・行動や意思疎通の問題が見られ、介助が必要とする。	着替え、食事、排便、排泄が上手にできない、時間がかかる、やたらに物を口に入れる、物を抱え損ねる、徘徊、失禁、大声、苛言をあげる、火の不始末、不眠行、性的異常行為等
IV	日常生活に支障をきたすような症状・行動や意思疎通の問題が顕著に見られ、常に介助を必要とする。	ラングIIIと同じ
M	著しい精神症状や行動異常あるいは重篤な身体症状が見られ、専門医療を必要とする。	せん妄、失調、興奮、自傷、他害等の精神症状や精神症状に起因する問題行動が継続する状態等

## (2) 判定にあたっての留意事項

認知症高齢者にも含まれていない認知症に関する症状のうち、「幻視・幻聞」、「被害・暴行」、「不潔行為」、「異食行動」等については、関連する項目の特記事項に記載するか、認知症高齢者の日常生活自立度の特記事項に記載すること。また、「火の不始末」は、「I-II」といふこととされ、評価されるので適切な選択を避け、特記事項に具体的な状況を記載する。

## 【ラングJ】

何らかの身体的障害等を有するが、日常生活はほぼ自立し、一人で外出する者が該当する。なお、「障害等」とは、疾病や障害及びそれらの後遺症あるいは老衰により生じた身体機能の低下という。J-1はバス、電車等の公共交通機関を利用して個別的にまた、かなり遠くまで外出する者が該当する。

J-2は隣近所への買い物や老人会等への参加等、町内の距離程度の範囲までなら外出する場合は該当する。

## 【ラングA】

「総たきり」に分類される「総たきり予備型」というべきグループであり、いわゆる house-bound に相当する。屋内での日常生活活動のうち食事、排便、着替に限り、必要に応じては自力で行い、留守番等を要するが、近所へ外出するときは介護者の援助を必要とする場合が該当する。

なお「ベッドから離れている」とは「座席」のことであり、よん使用の場合も含まれるが、ベッドの使用は本人にとっても介護者にとっても費用であり及が認められているところでもあるので、実質的にベッドという状態を使用した。A-1は寝たり起きたりしているものの食事、排便、着替はもとより、その他の日中時間内もベッドから離れている時間が長く、介護者がいればその介助のもと、比較的多く外出する場合は該当する。

A-2は日中時間内、寝たり起きたりしている状態にはあるもののベッドから離れている時間の方が長いが、介護者がいなくても自力で外出しない場合が該当する。

## 【ラングB】

「総たきり」に分類されるグループであり、いわゆる chair-bound に相当する。B-1とB-2とは居住を保つことを自力で行うか介助を必要とするかどうかで区分する。日常生活活動のうち、食事、排便、着替のいずれかにおいては、部分的に介護者の援助を必要とし、1日の大半をベッドの上で過ごす場合が該当する。排便に関しては、夜間のみ「おはつ」をつける場合には、介助を要するものとはみなさない。なお、「車いす」は一般のいすや、ホーグルトイ等で認められるものでも差し支えない。B-1は介助なしに車いすに移乗し、食事または排便に限り、介護者の援助を必要とする。

## 【ラングC】

ラングBと同様、「総たきり」に分類されるが、ラングBより障害の程度が重い者のグループであり、いわゆる bed-bound に相当する。日常生活活動のうち、食事、排便、着替のいずれにおいても介護者の援助を全面的に必要とし、1日中ベッドの上で過ごす。

C-1はベッドの上で常時臥床しているが、自力で搬送りをうつら体位を要する場合は該当する。C-2は自力で搬送りをうつこととなく、ベッド上で常時臥床している場合は該当する。